

# 米国からの高校生短期受け入れとその波及効果について

森 和憲\* 藤井 数馬\*\*

Receiving a High School Student from the U.S.A. and its Effects on Students  
at Kagawa National College of Technology  
Kazunori MORI and Kazuma FUJII

## Abstract

Kagawa National College of Technology (KNCT) received a female high school student from the U.S.A. who was invited by Mitoyo City. The student stayed for one month and took part in classes at the college. This paper will introduce the details of her stay and describe its effects on the students of KNCT from the perspective of cultural enrichment and English learning. The results of a questionnaire survey of students indicate that her stay had large effects on students' motivation for English learning and enhanced their minds toward a global society. On the other hand, we found that there are some problems in the acceptance of overseas students who cannot communicate at all in Japanese. This experience gives us some insight as to how to better handle accepting foreign students in the future.

*Keywords* : overseas student, English teaching, international exchange

## 1. まえがき

香川高等専門学校では、三豊市国際交流協会の依頼を受けて、米国からの高校生1名を一ヶ月間受け入れ、本校の授業を体験させるプログラムを行った。本稿では、実施の経緯と準備状況および実際の授業内容を紹介し、本事業の波及効果を議論する。

## 2. 経緯

香川高専詫間キャンパスは三豊市に所在するが、その外郭団体である三豊市国際交流協会が、国際交流を締結している米国ワウパカ市から女子高校生1名を受け入れ、ホームステイ事業を行うことになった。そして、その事業の一環として、本校詫間キャンパスにおいて授業見学をさせたいとの依頼が香川高専にあり、香川高専においては、国際交流室の所管の事業の一つとして詫間キャンパスで授業見学業務を取り扱うこととなった。

当該生徒の渡航の主な目的は日本文化の体験

であるが、同世代の生徒と一緒に日本語の授業を受け、そこから現代日本の文化を体験したいとのことであった。三豊市に3校ある高等学校ではなく、本校を選んだ理由は、1) 情報通信工学科在籍の女子学生が、三豊市国際交流協会を通じて当該生徒の家庭に以前ホームステイをしたことがあり、その女子学生からのサポートが期待できる、2) すでに留学生在籍しており、国際交流の経験が豊富である、3) 筆者(森)が三豊市国際交流協会の理事の職に就いており、事業全体を見渡せる立場にある、という3点にある。

一方、当事業を受け入れるにあたっての本校のメリットとしては、1) 本校学生の国際性の涵養、2) 三豊市との連携強化、3) 短期留学プログラム構築のテストケースとなる、という3点にある。

なお、当事業を「授業見学」としている事には理由がある。彼女は正規の留学生の扱いではなく、また、私費留学生のように授業料を徴収しているわけでもないため、単位認定や正式な出席証明書などを発行する事ができないからである。そこで、本校にとって当事業はあくまで三豊市国際交流協会の主催するホームステイ事業の中の一つのプログラムであるという認識で実施することになった。

\*香川高等専門学校詫間キャンパス 一般教育科

\*\*沼津工業高等専門学校 教養科

### 3. 授業見学の概要

#### 3.1 概要

期間：平成23年1月6日（木）～2月8日（火）

場所：香川高等専門学校詫間キャンパス

受入学生：米国人女子高校生1名（17歳）

使用言語：英語のみ

受入団体・主催：財団法人三豊市国際交流協会

ホームステイ：市内協会ボランティア登録者宅

通学方法：ホームステイ先による送迎

#### 3.2 授業見学

上記期間中、米国人女子高校生は、1年6組と行動をとるとし、基本的にはすべての授業を見学することとした。授業はすべて通常授業であり、彼女に対する特別な配慮は行っていない。

ただし、授業担当教員が見学を望まない場合、もしくは本人が望まない場合は、英語科教員の研究室もしくは図書館において自習をした。

1年生に組み入れた理由は、プログラム担当者である筆者（森）が1年生の授業を担当していることと、2年生以上の数学や専門科目等の授業は彼女にとって難易度が高いであろうと判断したことによる。

当初はすべての授業を受けることを予定としていたが、日本語のみの授業環境では彼女にとって負担が大きく、また、所属する高校から多くの課題提出を求められていたこともあり、全146時間の授業中、実際に彼女が見学した授業は92時間、自習は38時間であった。また三豊市国際交流協会のイベントで、16時間は市内の保育所や小学校を訪問した。

表1が示すように、彼女が好んで受けた授業は英語、創造実験、留学生対象の日本語授業、地理、体育、化学である。

これらを見学した理由は、英語や留学生対象の日本語授業は英語が通じ、化学は担任の授業であること、さらに、地理や体育は言葉に不自由しつつも内容を理解できたため、授業に参加しやすかったことにあるようである。

また創造実験では、レゴマインドストームを組み立ててプログラミングすることが楽しかったらしく、加えて当授業にはアメリカ人講師がアシスタントをしていたことも彼女を安心させたようだ(図1)。

逆に、物理や数学、国語は出席率が低かった。物理や数学の授業では、数式は理解できたものの、文章題が理解できず、結局何をやってよいのかが見当もつか

なかったようだ。数学の文章題は英語に訳してもらえれば理解できるという本人の要望もあったが、教員側の負担が大きく対応できなかった。

表1 各授業の出席率

	英語	創造実験	日本語 (留学生)	地理	体育
受講予定数	24	16	8	7	12
受講数	26	16	8	6	10
出席率	108%	100%	100%	86%	83%
	化学	歴史	物理	数学	国語
受講予定数	10	8	8	20	11
受講数	8	5	4	6	3
出席率	80%	63%	50%	30%	27%



図1 「創造実験」の授業風景

#### 3.3 課外活動

授業同様に課外活動にも積極的に参加した。特に彼女は所属高校の吹奏楽部でクラリネットを担当しているため、本校の吹奏楽部の学生と一緒に練習をして交流を深めた。

さらに、ホームステイ先の女子学生が所属しているサークル活動にも興味を示し、熱心に通っていた。当サークルは、地域の子どもたちと一緒に電子工作活動をすることを目的としており、放課後は、イベントの立案や電子工作の練習を行っている。彼女はこれまで電子工作をしたことがなかったので活動が楽しく、また、高学年の学生が積極的に英語で話しかけた事が嬉しかったようだ。

### 4. 一般学生への影響への調査

こういった米国からの高校生短期受け入れによって、受け入れクラスの学生の英語や英語学習に関する

意識に変化は見られるのだろうか。この点を調査するために、受け入れプログラムの前後に同じ質問紙調査を実施した(調査項目については、付録を参照のこと)。調査対象学生は、詫間キャンパスの平成 22 年度の 1 年 5 組, 6 組, 7 組 (有効回答数 118) の学生であり, 米国高校生が入った 6 組を実験群 (有効回答数 39) とし, 5 組, 7 組を統制群 (有効回答数 79) とした。なお, 以下では, プログラム前の調査を PRE, プログラム後の調査を POST と表示することにする。

#### 4.1 分析方法

この質問紙調査による分析の骨子としては, PRE の実験群と統制群の相互比較, POST の実験群と統制群の相互比較, 実験群内の PRE と POST の比較 (PRE→POST), 統制群内の PRE と POST の比較 (PRE→POST) の 4 つが柱となる。本稿では, 米国高校生受け入れプログラムの前後における意識変化を主たる調査対象とするため, 実験群内の PRE→POST の変化で顕著な差が表れたものについて, 統制群内の PRE→POST の変化と比較しながら結果を提示していきたい。

質問紙調査の Q1 から Q18 までは, いずれも五件法の調査である。これらの結果の考察については, 学生の意識の大きな流れに着目するために, 各質問項目に対して, 「5」「4」と回答したグループを「高意識群」, 「3」と回答したグループを「中意識群」, 「1」「2」と回答したグループを「低意識群」とした上で, いずれかの意識群において, PRE→POST で 10%以上の増加あるいは減少が見られた質問項目に注目しながら提示し, 考察していきたい。

#### 4.2 全体的な結果

まず統制群において, PRE→POST における 10%以上の顕著な変化があったものを挙げたい。五件法の調査である Q1 から Q18 の 18 個の質問項目において, それぞれの高意識群, 中意識群, 低意識群があるため, 合計 54 の調査対象があるが, そのうち, PRE→POST において顕著な変化が見られたのは, 「将来外国で勤務すると思うか (Q3)」に対する低意識群の減少 (58.8%→46.0%), および, 「将来外国で英語を勉強してみたいか (Q11)」に対する低意識群の減少 (62.5%→44.9%) の 2 つのみであった。ただ, そのいずれも高意識群には顕著な変化はなく (Q3 に対しては, 7.5%→10.3%, Q11 に対しては, 18.8%→23.1%), 低意識群の学生の一部が, これら質問に対して「分からない」と回答したことが原因だと考えられる。ただ, 全体的には, PRE から POST まで, おおよそ 1 カ月間しか経っていない

ため, 両調査において概ね似通った傾向がでたのが統制群の特徴である。

一方, 米国人留学生が入った実験群においては, 「英語は皆さんの将来にとって重要だと思うか (Q1)」に対する高意識群の減少 (87.2%→76.8%), 「学校で英文法を勉強する必要があると思うか (Q5)」に対する高意識群の減少 (76.9%→64.1%), 「学校で英文読解を勉強する必要があると思うか (Q6)」に対する高意識群の減少 (76.8%→66.7%), 「学校でもっと英語を勉強したいか (Q8)」に対する高意識群の減少 (30.8%→20.5%), 「将来日本で英語を使った仕事をしてみたいか (Q13)」に対する低意識群の減少 (58.9%→43.6%), 「英語を勉強する事で, 将来, 社会で認められたり, 活躍したりしたいと思いますか (Q17)」に対する高意識群の増加 (48.7%→59.0%), 「英語を勉強するのは, テストがあるから, または単位が必要だからだと思いますか (Q18)」に対する高意識群の増加 (53.6%→66.7%) の合計 7 項目あった。

統制群と実験群を比較すればわかるように, PRE→POST において, 何らかの大きな意識変化が実験群に多く見られたことは指摘すべきことである。これは, 両群の間で被験者数が異なることに帰する部分もあるだろうが, 全般的に言えば, 今回の事業によって, たとえそれが一ヶ月間という期間で尚且つ全授業をそのクラス学生とともに受講していなくても, 米国人高校生がクラスに入ったことによって, そのクラスの学生の英語学習に対する意識に, 他のクラスの学生と比較して, 何らかの強い影響を与えた可能性があることが示唆された。

#### 4.3 実験群と統制群の比較による結果

以下では, PRE→POST における意識変化に関して, 統制群と実験群の比較において, 顕著な差を提示していきたい。

まず, 学校での英文法学習の必要性に関する意識 (Q5) に関して, 統制群では高意識群が 75.0%→70.5%と 4.5%の減少であったのに対し, 実験群では先に示したように 12.8%減少した。また, 図 2 と図 3 に示すように, 学校での読解学習の必要性に関する意識 (Q6) に関して同様の傾向が見られ, 統制群では高意識群が 78.8%→78.5%と 0.3%の減少だけであったのに対し, 実験群では 10.1%減少した。

しかし, 実験群における, 英会話学習の必要性 (Q4), 聴解学習の必要性 (Q7) の高意識群の意識変化については, 英会話では 71.8%→71.8%と差がなく, 聴解においても 82.0%→76.9%と 5.1%の減少にとどまったこ

とから、今回の事業により米国人高校生が入ったクラスでは、その他のクラスと比較した場合、文法や読解学習の必要性に対する意識低下が大きく見られたことが分かった。

ただし、文法や読解学習の必要性を感じている学生は POST でも 6 割以上おり、低意識群の割合は、いずれも 10%程度という数字が示していることから、実験群の学生も、文法や読解学習を否定しているわけではないことには注意が必要である。また、コミュニケーション力向上のために文法力や読解力も必要であることを鑑みれば、こういった学習への意識の低下が起らないように、コミュニケーション能力向上におけるそれらの意義や役割を学習者に示したりしながら、学習動機や意識を高めることが指導者に求められるだろう。

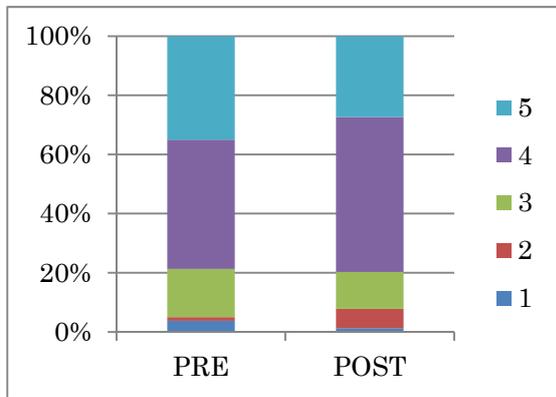


図2 読解学習必要性への意識変化 (統制群)

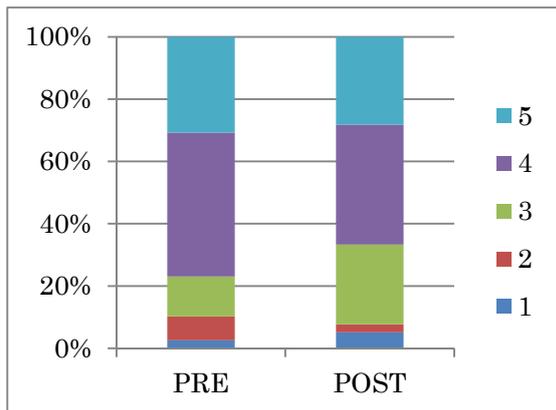


図3 読解学習必要性への意識変化 (実験群)

また、図4と図5が示すように、英語を使った仕事をしたいかどうか (Q13) の質問に対して、統制群の低意識群では 56.3%→59.0%と大きな変化はなかったのに対し、実験群では 58.9%→43.6%と 15.3%の減少が見られた。さらに、英語学習の社会承認動機 (Q17)

に対しては、実験群では高意識群の増加 (48.7%→59.0%)が見られたが、統制群では 57.5%→50.0%と 7.5%の減少があった。そして、英語学習の状況必然動機 (Q18) に対して、実験群での高意識群の増加 (53.6%→66.7%) に比べると、統制群では高意識群の増加幅は少なかった (42.6%→47.5%)。

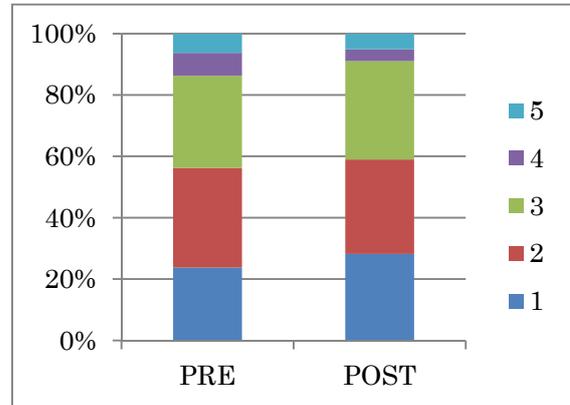


図4 英語を使った仕事をしたいか (統制群)

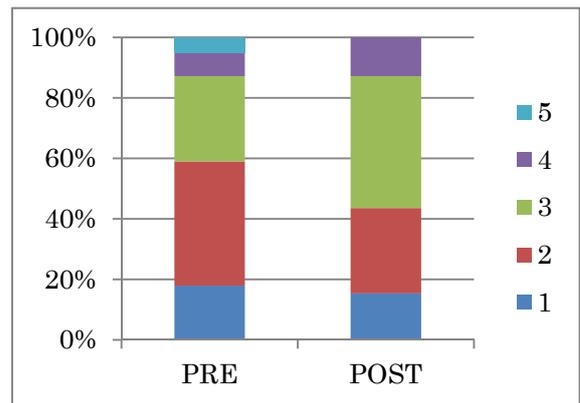


図5 英語を使った仕事をしたいか (実験群)

このように、実験群では、統制群と比して、将来の仕事と英語に対する見方や外発的な英語学習動機に関する意識変化が大きく見られた。この考察を確証的に論じることはできないが、英語を母語とする高校生を同じクラス内に受け入れたことにより、英語を以前より現実的なものとして対峙した結果による影響と示唆することもできるだろう。

さらに Q19 として、自由選択形式で、海外の人とコミュニケーションをとる際に、大切な要素や能力として 1 番大切なもの、2 番目に大切なもの、3 番目に大切なものを、「語彙、英文法、発音 (イントネーションやアクセントを含む)、リスニング力、リーディング力、積極性、協調性、自国や他国の文化や歴史や事情を知っていること、ジェスチャーや顔の表情、日本

語の力、その他」の中から、それぞれ選ばせた。

その中で、実験群の PRE→POST において最も顕著な変化が見られたのが、「発音」である。以下の表 2 に見られるように、実験群の POST でその重要性を感じる学生が増えているのが見取れる。1 番大切だと感じる学生が 1 人から 4 人に増加し、全体でも 8 人から 15 人とほぼ倍増した。一方、統制群では、1 番大切と回答した学生が 5 人→7 人で、全体では 28 人→30 人であり、実験群ほどの大きな変化は見られなかった。実験群では、この事業をとおして、英語によるコミュニケーションにおいて発音の重要性を以前より強く認識するようになったことが窺える。

表 2 発音の重要性の意識変化 (単位: 人)

		1 番大切	2 番目大切	3 番目大切
実験群 n 39	PRE	1	4	3
	POST	4	6	5
統制群 n 79	PRE	5	10	13
	POST	7	11	12

表 3 文法の重要性の意識変化 (単位: 人)

		1 番大切	2 番目大切	3 番目大切
実験群 n 39	PRE	6	5	3
	POST	4	5	5
統制群 n 79	PRE	9	7	6
	POST	11	10	3

逆に、「文法」に対する実験群の意識は若干減少した。これは、先に論じた統制群における Q5 への回答結果と軌を一にするものである。実験群において、1～3 番目として文法を挙げた全体数では変化がないものの、文法が 1 番大切だと感じる学生は 6 人→4 人に減少した。一方、統制群では、全体数では 22 人→24 人となり、文法が 1 番大切だと感じる学生が 9 人→11 人に、2 番目に大切だと感じる学生が 7 人→10 人に増加した。

## 5. 米国高校生からみた本校の問題点

滞在の最終週に、本校の感想や気づいた点、日本の学校と米国の高校との違いについて、自由に記述をする課題を課した。そこには本校や高専、および日本の教育システムに対する多くの示唆があった。いくつかを簡潔に紹介したい。

1. 授業に遅れてくる学生がいる
2. 携帯電話や携帯ゲーム機器を使っている

3. 寝ている学生を教師があまり注意をしない
4. 常駐の警官がない
5. ドラッグテストがない
6. 教室が無味乾燥である
7. 英語の授業が細分化されている

1～3 に関しては、我々教員も対応に苦慮しているところではある。しかし、彼女の通っている高校ではこれらは厳しく指導されているようで、彼女は本校の学生に対して、「lazy(怠惰な)」という印象を持っていた。

その一方で、4 や 5 のように彼女の学校では警官が常駐し、定期的にドラッグテストを行っているようで、日本の学生が授業に対してこれほど怠惰なのに、校内での麻薬問題がないことは、彼女には理解しがたいようだ。

また、6 に関して、本校の教室は米国の教室と比べて、無味乾燥だと指摘している。彼女の学校では学生の写真や芸術などの授業の成果を校内の至る所に掲示しているようだ。この点は本校も見習うべきである。

最後に 8 の英語の授業に関しては、本校での授業がリーディングや会話、文法などに細分化している点が、自分が受けているドイツ語の授業とはスタイルが全く違うとのことであった。また英語教師がほとんど英語を喋らずに授業が進んでいる事にも驚いていた。この指摘についても今後の授業改善に役立てていきたい。

## 6. まとめと今後の課題

本プログラムは、本校の学生にとっては、一緒に授業を受けることで、外国の文化や言葉に対する興味がわき、英語学習に対する考え方の変化や、モチベーション向上につながったといえる。さらに、当該学生により提出されたレポートには、外国人からみた本校および日本の学校教育システムの問題点がいくつか提示されており、我々教員にとって非常に示唆に富んでいた。

また、今回の事例を通して、三豊市国際交流協会と良好な関係を築き上げることができ、本校の国際交流の案件においても、協会に協力を依頼する事ができるようになった。さらに、本事業は四国新聞や彼女の地元の新報にも取り上げられ、本校の PR 活動にも貢献したと言える。<sup>注2)</sup>

これらから判断すると、本プログラムは概ね成功であったように思われる。

しかしその一方で次のような課題も浮き彫りになった。

まず、日本語による授業を全て見学するには当該学生の負担が大きすぎ、出席率が 60%台になってしまった。今後は英語に関連する授業を中心に見学プログラムを作成するか、もしくは英語指導助手的な立場で学生を活用する方法を思案する必要がある。

また、今回は筆者が担当する関係上、1年生のクラスと行動を共にさせたために、年齢に差があり、クラス内でのコミュニケーションがあまり成立していなかったように思われる。実際にはホームステイ先の学生やサークルの上級生、本校の留学生と行動を共にしていた。今後は年齢を考慮した配置や、奥山(2010)<sup>1)</sup>や竹田(2010)<sup>2)</sup>で提案されているような国際交流クラブや日本人チューターを組織化して活用する必要がある。

以上、本プログラムを概観してきたが、当事例をテストケースとし、そこから得られた知見を本校の短期留学プログラムの構築に活用したい。

#### 注記

注1) 本稿は平成 23 年度全国高専教育フォーラム(2011 年 8 月 25 日於：鹿児島大学)において発表されたものに加筆・修正を加えたものである。

注2) 「日本の文化学びたい：米・ワウパカ市の生徒が三豊市滞在 香川高専で親交深める」。四国新聞 2011 年 1 月 8 日付 p.22, および “High school student visits Japan”, County Post West March 3, 2011 ページ番号不詳。

#### 参考文献

- 1, 奥山慶洋, 茨城高専の取り組み：国際交流センターおよび国際交流クラブの活動と留学生支援, 平成 22 年度留学生国際交流担当者研究集会報告書, pp. 75-80, 2010
- 2, 竹田恒美他, 都市型高専の特徴を活かした留学生施策と日本人チューター教育を含めた統合プログラム(TOKYO Links)の開発, 平成 22 年度高専教育講演論文集, 国立高専機構, pp. 269-272, 2010

付録

## 1年生英語学習アンケート

- Q1:英語は皆さんの将来にとって重要だと思えますか？ 全く思わない 1・2・3・4・5 強く思う
- Q2:将来日本で英語を使った仕事を将来すると思えますか？ 全く思わない 1・2・3・4・5 強く思う
- Q3:将来外国で勤務すると思えますか？ 全く思わない 1・2・3・4・5 強く思う
- Q4:学校で英会話を勉強する必要があると思えますか？ 全く思わない 1・2・3・4・5 強く思う
- Q5:学校で英文法を勉強する必要があると思えますか？ 全く思わない 1・2・3・4・5 強く思う
- Q6:学校で英文読解の勉強をする必要があると思えますか？ 全く思わない 1・2・3・4・5 強く思う
- Q7:学校でリスニングの勉強をする必要があると思えますか？ 全く思わない 1・2・3・4・5 強く思う
- Q8:学校でもっと英語を勉強したいですか？ したくない 1・2・3・4・5 したい
- Q9:自宅(寮)でもっと英語を勉強したいですか？ したくない 1・2・3・4・5 したい
- Q10:英語が好きですか？ 大嫌い 1・2・3・4・5 大好き
- Q11:将来外国で英語を勉強してみたいですか？ したくない 1・2・3・4・5 したい
- Q12:将来外国で勤務してみたいですか？ したくない 1・2・3・4・5 したい
- Q13:将来日本で英語を使った仕事をしてみたいですか？ したくない 1・2・3・4・5 したい
- Q14:英語を勉強する事で、海外の人と知り合いになりたい、仲良くなりたいたいと思えますか？  
全くそう思わない 1・2・3・4・5 強くそう思う
- Q15:英語を勉強する事で、海外の音楽や映画やスポーツを知りたいと思えますか？  
全くそう思わない 1・2・3・4・5 強くそう思う
- Q16:英語を勉強する事で、海外の文化やものの考え方や言語そのものを知りたいと思えますか？  
全くそう思わない 1・2・3・4・5 強くそう思う
- Q17:英語を勉強する事で、将来、社会で認められたり、活躍したりしたいと思えますか？  
全くそう思わない 1・2・3・4・5 強くそう思う
- Q18:英語を勉強するのは、テストがあるから、または単位が必要だからだと思えますか？  
全くそう思わない 1・2・3・4・5 強くそう思う
- Q19:海外の人とコミュニケーションをとる際(英語で話したり、書いたりする際)、スピーキング力・ライティング力以外で、以下のうち、特にどの要素や力が大切だと感じますか。1番大切と感ずるもの、2番目に大切と感ずるもの、3番目に大切と感ずるものを、それぞれ番号で回答してください。

1. 語彙
2. 英文法
3. 発音(イントネーションやアクセント等含む)
4. リスニング
5. リーディング
6. 積極性
7. 協調性
8. 日本や相手国の文化や歴史や事情を知っていること
9. ジェスチャーや顔の表情
10. 日本語の力

1番大切( ) 2番目大切( ) 3番目大切( )